

## 欄間(らんま)

伝統的な和室では、障子や襖と天井までの間の空間に透かし彫りしがはめ込まれています。

これを「欄間(らんま)」と言います。もともとは湿気の多い日本の風土で換気のために、また、採光のために、この部分を開けたもので、平安時代の絵巻物にも原型を見ることができるといふことです。

開けた空間に障子をはめたり、板の透かし彫りをはめたり、次第に装飾的に発達して今の「欄間」になるわけです。

透かし彫りの欄間で、夜、隣の部屋の明かりが欄間を透かしてこちらの部屋の畳や布団に影を落とすのも風情があるものです。

都市型の家ではほとんど見かけなくなりました。機密性、空調があれば、空間の必要性もうすくなくなり、洋風のインテリアならなおさらのことです。そこで、体験型教育旅行などで田舎の家に初めて泊まる都市の子どもたちの眼には、欄間は不思議な珍しい空間に映ります。



繊細な細工ものから木目を活かす大胆な鑿の運びのうかがえるもの、さまざまなものがありますが、題材は例外なくめでたい図柄で、家族の長寿や家の繁栄を願う思いが込められています。田舎の家の大きな魅力のひとつです。

宿のおとうさんやおかあさんにその意味や背景を教えていただくのもおうち宿の旅の味わいです。



ここでご紹介するのは高砂をテーマにした欄間。(高知県黒潮町「漁家民宿 魚影」さん)

床の間側、長いひげの翁(おきな)が釣り竿を持っています。右隣にかごを背負った媪(おうな)の後ろ姿が見えます。

反対側から見ると、穏やかな媪の笑顔が見えます。



欄間の趣向には、めでたいものが選ばれます。  
鶴と亀。言うまでもなく、長寿繁栄を表すもの。  
背景はこれも繁栄の象徴である松です。

宿 魚影さん  
（高知県黒潮町「漁家民」）



めでたいもののほかに、名所旧跡も題材として選ばれます。

ありがたいもの、として喜ばれたのでしょうか。

デザインは花の季節の錦帯橋。橋の下には川のしづきも見えます。

(高知県四万十市「農家民宿こんぴら」さん)

竹に雀は取り合わせのよいものといわれます。

取り合わせ、という言葉をだんだん聞かなくなってきました。調和？バランス？仲良し？なんだか説明しにくいですが、心の居心地がよくて先行き破綻がないこと、そういうふうに思います。

この欄間は「農家民宿いちよの樹」のおじいちゃんの手になるもの。昔、腕の良い大工さんだったおじいちゃんは、大工さんを辞めて農家になりました。大工さんとしての最後の仕事で、この欄間を掘りました。

下書きの鉛筆の跡が残っているやろーと、謙遜されますが、闊達な鑿削き、素朴な味わい。素敵です。

